

SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」

ー 担当教員のゼミナールと連動したプロジェクトを中心に ー

池村明生*1・藤吉正明*2・万城目正雄*3・吉村維元*4・貴家勝宏*5

1. はじめに
2. 2021 年度の授業概要
3. 2021 年度の実施プロジェクト
ー 担当教員のゼミナールと連動したプロジェクト ー
4. おわりに

1. はじめに

2021 年度の SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、前年度の体制を遵守しながら春学期から秋学期にかけて通年を通じて開講した。春学期はオムニバス形式の座学「人間学 1」を 2 年次生中心に、また秋学期は担当教員ごとに行うゼミナール形式の実践授業「人間学 2」を 3 年次生中心に実施した。前年度から続く新型コロナ・ウィルス感染症による波が繰り返される中、大学から指示される感染症対策を徹底し、ライブ型のオンライン授業を取り込みながら各授業 14 コマを開講した。受講する学生たちにとっても、コロナ禍における授業の取り組みに慣れてきたこともあり、前年度に比べ落ち着いた状況であった。

一方、大学全体で実施する 2022 年度の改組改編は教養学部においても予定され、これまでの 3 学科（人間環境学科／芸術学科／国際学科）5 課程（自然環境課程／社会環境課程／音楽学課程／美術学課程／デザイン学課程）の組織体制から、2 学科体制（人間環境学科／芸術学科）へと移行することになった（※各課程は廃止し学科に統合、※国際学科は国際学部として湘南・高輪キャンパスで開設）。よってそれぞれの新たな学科のカリキュラムが見直される中、学科課程横断型の学部共通科目であった「人間社会論（旧 現代文明論 2）」や「人間学 1・2」を通じて開講してきた SOHUM プログラムは新カリキュラムにおいては継続されることなく、2021 年度入学生を最後の対象学生として終了することとなった。

2. 2021 年度の授業概要

2021 年度の SOHUM プログラムは、春・秋学期を通じて開講するプロジェクト全体のバランスを考え、湘南地域ブランド創造プロジェクトは「人間学 1」を春学期に、また「人間学 2」を秋学期に開講した。担当教員は前年度に引き続き 5 名体制で推進した。

「人間学 1」は「地域ブランド創造」を共通テーマに、5 名の教員が Microsoft Teams を使ったオンライン授業によりオムニバス形式で講義系授業を担当した。1 クール「地域ブランド」（池村）、2 クール「湘南の自然」（藤吉）、3 クール「創造とアート」（吉村）、4 クール「地域マーケティング」（万城目）、5 クール「地域産業と

戦略」(貴家)といった流れにより、2年次生を中心に107名の学生を指導した。授業は水曜1限(9:00~10:40)を使った全14回のライブ型のオンライン授業であり、内容は日本各地で起こっている地域ブランドのムーブメントの紹介や「湘南」「地域」「ブランド」といったテーマを題材に進めた。

「人間学2」では人間環境学科の自然環境課程8名、社会環境課程4名、芸術学科の音楽課程1名、デザイン学課程7名、国際学科12名の総計32名の学部生が履修した(音楽学課程の学生の履修は本人の勘違いと思われる、すべての授業では欠席であった)。その他の履修生は藤吉(自然環境課程)・万城目(社会環境課程)・池村(デザイン学課程)・貴家(国際学科)が開講するゼミナールを履修する3年次生であり、各教員が実施するゼミナールのプロジェクトと連携を取りながら対面授業で進められた。またそれぞれのゼミナールでの取り組みを「人間学2」の担当教員と全履修生間で理解するため、月1回(9、10、11、12月、1月)を“コア日”と設定し、教員5名と全履修生32名が参加するライブ型のオンライン授業を通じて報告会を開催した。

また「人間学1」および「人間学2」ともオンライン授業の出欠確認は、前年度の秋学期から導入した「Open LMS」の授業支援システムを活用し、各回の授業初めにその日の出席パスワードを学生たちに公開しながら、各履修生が制限時間の中でパスワード登録する方法を採用した。さらに「人間学1」では教員ごとに担当する最終の講義回でレポートを課し、Teamsファイル上に設けた各教員の提出BOXに提出してもらい評価した。

3. 2021年度の実施プロジェクトー担当教員のゼミナールと連動したプロジェクトー

2021年度のプロジェクトは、前年度同様に担当教員のゼミナールと連動するかたちで様々なプロジェクトが実施された。

3-1 自然環境課程 藤吉ゼミナールのプロジェクト報告

藤吉ゼミナールでは、人と自然のかかわりを考える教育・研究活動を進めており、本科目ではその一環として衣・食・住・遊という視点で環境保全と絡めた活動を展開することを目的とした。本年度のプロジェクトについては、「衣」に着目し、湘南地域に生育する植物を草木染として活用することで木綿布の染色を実施(草木染プロジェクト)した。

① プロジェクトの概要

草木染プロジェクトは、湘南地域に生育する植物、特に近年話題となっている外来植物を活用し、それらを草木染に活用することで、染色した布を用いて小物作りを行うプロジェクトである。制作した小物としては、コロナ禍ということもあり、染色布を用いてマスク作りを実施した。

② プロジェクトの経過

湘南地域には、数百種類の外来植物が侵入・定着しているため、その中でも特に濃く染まりやすい植物を調査し、その濃く染まるのが判明した植物を材料にして染色を行うこととした。染色は、外来植物の葉や茎を中心に採取し、それらを水2Lに対して100g使用し、約30分煮込んで煮汁を作った。その後、その煮汁と銅や鉄が含まれた媒染剤をそれぞれ金属ごとに用意し、煮汁と媒染液に交互に浸しながら染色を行った。また、布に模様を入れるために絞も施した。布の染色後、型紙を用いて裁断し、手縫いでマスクを作製した。

③ プロジェクトの成果

複数の染色を行った結果、湘南地域の身近な環境に生育する植物



トウカエデの染色



コセンダングサの染色

の中でより短時間に濃く染まる植物としては、鉄媒染を用いた染色ではトウカエデやオオニシキソウ、メマツヨイグサなどが挙げられる。また、銅媒染で濃く染まる植物としては、コセンダングサやオオキンケイギク、マリーゴールドなどが挙げられる。これらの植物を用いて布を染色し、最終的には思い思いのマスクを制作した。染色布には絞り模様を入れていたために、それぞれ個性的なマスクを仕上げる事ができた。このプロジェクトで草木染に興味を持った学生が卒業研究としてさらに多くの外来植物を対象として、より短時間でより濃く染まる植物を複数見出すべく、調査・実験を進めている状況である。今後は、草木染の成果をもとに環境教育活動として草木染活動を発展させていく予定である。



製作したマスク

3-2 社会環境課程万城目研究室のゼミナール連携プロジェクト【湘南地域の課題検討プロジェクト】

①プロジェクトの概要

新型コロナウイルスの感染拡大のため、2021年度もNPO等との協働による学外における大人数でのプロジェクトの実施が見送られることとなった。そのため、2021年度は、湘南の地域産業として発展してきたみかん農家が抱える課題を検討し、その解決に向けた方策をとりまとめ、報告した。

また、湘南地域のNPOの協力の下で、湘南地域に所在する企業とも連携し、当該企業で働くベトナム人技能実習生と万城目研究室の学生が、みかん農園で国際交流を行うイベントを行った。

②プロジェクトの経過

NPOの支援を受けて、湘南地域のみかん農家を訪問し、地域産業として発展してきた湘南のみかん産業が抱える課題についてヒアリングを行った。その課題を研究室に持ち帰り、地域人口の推移、みかんの生産量等のデータを確認したうえで、湘南のみかん産業の活性化に向けた方策を検討した。

③プロジェクトの成果

万城目研究室の学生が3つ班に分かれ、湘南のみかん産業をケーススタディーとした湘南地域産業の課題について検討し、その成果をスライドにまとめ、NPOに報告することができた。

また、NPOの支援を受けて、湘南地域に所在する企業で働くベトナム人技能実習生と万城目研究室の学生が、湘南のみかん農園で交流するイベントを企画し、実施することができた。



みかん農園での収穫体験

3-3 デザイン学課程 池村ゼミナールのプロジェクト報告

池村研究室では、2021年度の「ゼミナール」の履修生9名を中心に、例年に倣い春・秋学期の通年を通じて学生たちのデザイン提案につなげる様々なプロジェクトを実施した。

1) 平塚市地産地消普及活動「ベジ太プロジェクト」「ベジタもなかプロジェクト」

毎年継続的に取り組んできた平塚市農水産課と連携するプロジェクトである。2021年度はコロナ禍のためイベントはすべて開催されず、学生たちは前年度に行った以下2つの取り組みに協力した。

①「ベジタまぬり絵」の原画制作

9名のゼミ生全員が一人1点の原画を制作して平塚市農水産課に提出。その後、平塚市ホームページにダウンロードできる原画がアップされた。



ぬり絵と野菜の種のパッケージ

②「ベジ太野菜の種パッケージ」のデザイン提案

9名のゼミ生全員が一人1点のパッケージデザインを制作して平塚市農水産課に提出。その後、1名のデザインが選ばれ、オリジナルの野菜の種パッケージが印刷された。

2) ラスカ平塚「産学連携ギャラリー作品展示」

半年ごとに展示作品の掛け替える運営方法で毎年継続的に実施してきたプロジェクトである。2021年度も以下の概要でゼミ生による作品が展示された。

一方、このプロジェクトは、ラスカ平塚を運営する湘南ステーションビル株式会社と学校法人東海大学とのあいだで契約する「ラスカ平塚産学連携型ギャラリー運営プロジェクト研究の委任」による取り組みであり、第16回企画で研究期間が一旦終了するタイミングであったことで、2021年12月に両者間で再契約を締結し、2022年1月から2024年3月を研究期間に第20回企画までを継続することとした。

①第15回企画「あかり」展（2021年4月～9月）

前年度にゼミ生であった新4年次生8名により、「あかり」をテーマとした写真作品18点が展示された。

②第16回企画「日常」展（2021年10月～2022年3月）

2021年度のゼミ生（3年次生）9名により、「日常」をテーマとした写真作品18点が展示された。

3) 伊勢原あふりしゃもラーメンのパッケージデザイン提案

前年度に引き続き東海教育産業株式会社のグループ企業である株式会社セゾオンより、伊勢原うまいものセレクト商品をめざす「あふりしゃもラーメン」のパッケージデザインの提案が依頼される。ゼミ生9名が一人1案のデザインを提案。その後、1名のデザインが選ばれ、商品化に向けたパッケージデザインがブラッシュアップされるも、商品開発に向けた材料提供の課題が浮上して開発を断念した。

4) 平和を考えるフォーラム「平和パネル展」出展物制作協力

秦野市内で継続的に活動続ける「はだの・平和都市宣言につどう会」の方から秦野市経由で「平和パネル展」に展示する出展物の制作の協力が依頼。会場のサイン看板を兼ねる大型ボードの制作に絡み、ゼミ生9名が「平和パネル展」（2021年8月13日～）に展示する「PEACE」をテーマとするポスターを制作して出展した。

5) 秦野市スポーツ推進課「はだの丹沢水無川マラソン」ロゴマーク&Tシャツデザイン

前年度に引き続き秦野市スポーツ推進課からのロゴマークのデザイン提案プロジェクト。2021年度は秦野市主催のハーフマラソン「はだの丹沢水無川マラソン」のロゴマークとTシャツが依頼され、ゼミ生9名が一人1点ずつロゴマークとTシャツのデザインを提案。その後、1名の学生のデザインが選ばれ、ロゴマークとTシャツのデザインが採用された。



第15回企画「あかり」展



第16回企画「日常」展



あふりしゃもラーメンの
パッケージデザイン



学生が制作したサイン看板



「はだの丹沢水無川マラソン」ロゴマーク

6) 非営利団体 ASOBI 隊「開成町パレットガーデン」ハロウィーンイベントサポート

子ども・子育て支援活動助成事業を行う非営利団体「ASOBI 隊」の依頼で発生したプロジェクト。ゼミ生 9 名がハロウィーン会場に点在される 4 種類のキャラクター・イルミネーションボードを制作。さらにイベント当日には 6 名の学生がコスプレ衣装をまとい参加し、クイズラリーの運営をサポートした。



制作したイルミネーションボード

7) 小田原市立中央図書館 館内掲示物・コーナー表示のデザインリニューアル提案

小田原市立中央図書館（愛称：かもめ図書館）の館内掲示物の基本フォーマットデザインと予約本コーナーの表示改善策のデザイン提案が依頼され、ゼミ生 9 名が 2 グループに分かれてプレゼンテーションを行った。12 月には館内見学会、1 月にはプレゼンテーションといった強行日程であったが、ゼミ生は具体的な内容をもって効果的なデザインを提案した。その後、春休み期間を利用して 4 名の学生たちが、予約本コーナーのガラス装飾を実際に施工した。

プレゼンテーション
した学生



プレゼンテーション
の様子



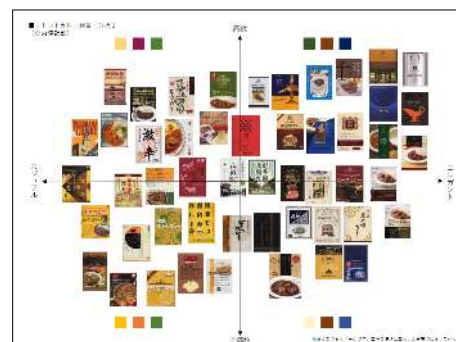
8) 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ レトルトカレーパッケージデザイン提案

昨年度終了間近に横浜ベイシェラトンホテル&タワーズの総支配人からデザイン学課程にオリジナルの外販商品となるレトルトカレーのパッケージデザインを学生たちに提案してもらいたいとの依頼があった。依頼理由は「コロナ禍の状況において海外ブランドホテルといえども地域顧客が重要となっており、外販商品の開発を通じて地域に根ざしたホテルであることをアピールしたい」との思いであった。

池村研究室ではゼミ生 9 名を中心に、2021 年度の春学期の初めからデザイン提案に向けた取り組みをスタートし、約 1 年をかけて以下の流れをもってプロジェクトを進めた。

- ①既存のレトルトカレー商品のパッケージデザインの研究
- ②横浜ベイシェラトンホテル&タワーズからのプロジェクト
レクチャー
- ③横浜ベイシェラトンホテル&タワーズの視察およびカレーの
試食会
- ④横浜ベイシェラトンホテル&タワーズに対するデザイン提案
プレゼンテーション
- ⑤優秀者 3 名の決定にともなう表彰式
- ⑥最優秀者 1 名によるデザイン案のブラッシュアップ
- ⑦商品販売に際してのパブリシティ発表と学内報告会

最終的には黒毛和牛を生かした横浜ベイシェラトンホテル&タワーズのオリジナル商品「横浜ビーフ」カレーが学生提案のパッケージデザインとともに開発され、2022 年 3 月に正式に発売された。



既存のレトルトカレー商品のデザイン分析



表彰式の様子



発売された「横浜ビーフ」カレー

3-4 国際学科 貴家ゼミナールのプロジェクト報告

【地域活性化プロジェクト「ちばぎん・はまぎん学生ビジョン」】

①プロジェクトの概要

千葉銀行と横浜銀行が将来の地域経済の担い手となる学生の起業家精神の醸成を目的とする「ちばぎん・はまぎん学生ビジコン 2021」に学生のビジネスプランを企画して応募した。

②プロジェクトの経過

専門ゼミナールと連携し、「地域活性化に繋がるビジネスプラン」を検討し、教育分野、高齢者のサポート、空き家を活かせる社会づくりを中心に千葉と横浜地域の特性に合わせ、各種データを集め話し合いを重ねた。パワーポイントを作成し二度の授業での発表を経て、最終応募書類の作成に取り組んだ。

③プロジェクトの成果

専門ゼミナールの3つのグループをベースに、教育分野ではコロナの感染拡大で増えたといわれる不登校の子供たちをオンラインでサポートするアプリの提案をした。高齢者のサポートビジネスについては、学生の潜在的な能力を活用し高齢者の必要とするサービスの提供手段を提案した。高齢者を支援するビジネスは民間業者が数多く行っているが、学生が主体となる案で、利用側の料金を抑えつつ、学生にとっては高齢者を通じ多くの社会経験を学ぶことができる。また、増え続ける空き家対策と持続的な地域活性化のプランとしては、空き家の貸し手と借りる側をマッチングするアプリの提案をした。コロナ禍でテレワークへの需要が高まり、地域活性化を空き家対策と連動するものである。活動を振り返ると、コロナ禍の中、オンラインでの活動が中心となったが、教育分野、高齢者支援、空き家対策をターゲットに据え、地域の持続的発展のために何が必要なのかを考え、話し合いを重ねて関心を深めた。スマホやアプリを活用する斬新なアイデアは学生ならではのアイデアであった。参加学生12名。

4. おわりに

2021年度の湘南地域ブランド創造プロジェクトは、前年度から続くコロナ禍においても教養学部が学部共通科目として、開講するプロジェクトが減少する中、学部生に対して一定の学習内容が提供でき、かつ学部運営に貢献することができた。これは湘南地域ブランド創造プロジェクトのテーマ「地域ブランド」が、湘南キャンパス周辺の自治体等にとって共通の課題テーマであり、かつ教養学部を構成する人間環境・芸術・国際それぞれの学科課程においても取り込みやすい学習テーマであったことが起因している。さらに連携組織団体から依頼される課題もコロナ禍を背景にしている内容が目立ち、学生たちにとっても理解しやすい取り組みにつながったと考えている。

一方、「はじめに」でも触れたように、大学全体で実施する2022年度の改組改編によりSOHUMプログラムは徐々に終了を迎えることになった。しかし2000年以降、大学を含む高等教育機関に求められた社会貢献活動は東海大学およびこの教養学部においても引き続き継続されるべき課題であり、今後もSOHUMプログラムで掲げる実践型教育プログラムを通じたシティズンシップ教育は重要なテーマとなる。特にフィールドワークを特徴とする人間環境学科および芸術学科で構成される新教養学部においては、湘南地域ブランド創造プロジェクトのみならず、13年目を迎えたSOHUMプログラムにおいてこれまでに培った学外資源は重要な教育素材であり、新たな体制においても活用していくべき財産と考えている。